

**2013年 CSA ワーキング・スタディ・ツアー  
参加者感想文(寄稿)**

# 2013 ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

連合・総合組織局 連帯活動局 加藤 栄 二

今回の2013年CSAワーキング・スタディ・ツアーは、経済的、社会的に恵まれない人々との交流を通じ生活実態の把握し、生活困窮者の自立支援に役立っているかの視察を目的としてタイおよびラオスを訪問した。訪問先は、ラオス保健省、教育省、タイ社会開発福祉省、在ラオス日本大使館、在タイ日本大使館などであり、タイやラオスの教育や福祉、経済など様々な問題や現状について意見交換をした。

## 1. 学校の視察

クッサンバット村小学校(1番目校)、ムアンソン村小学校(18番目校)、タフウア村小学校(17番目校)を訪問したが、共通点として、これらの学校の子供たちはCSAの学校建設事業がなければ、2時間でも3時間でも歩いて学校まで通わなければならない子どもたちである。

また、5日目に視察したCSAが寄贈したサンティパーブ高校寮は、各学年30名、計90名まで収容可能で、CSA「遠隔地高校生支援事業」として食費、教材、寮職員の経費など維持費として毎年支援している。生徒たちはラオス北部の各県で成績優秀にもかかわらず、貧困などで高校進学を断念しなければならなかった生徒たちであり、毎年卒業生のほとんどが、国立大学をはじめ進学をしている。日本にも毎年2名程度の留学生を受け入れていることから、今後、現地の現状報告を求めるなど支援先の現状把握に努めたい。

## 2. 救援衣料

(1) ラオス保健省の衣料倉庫：人手不足もあり、11月に到着した衣類のダンボールの仕分け作業が難しく、CSAではダンボールに品名、大人、子供などの内容を日本語、英語、ラオス語で表示するなどきめ細かい対応をしており、次回の救援衣料が届くまでには全て配付も終わるとのことだった。

(2) タイの救援衣料：経済発展が著しいタイでの支援について、在タイ日本大使館の伊藤書記官にお伺いしたところ、「バンコクは特別で、タイでは地方との格差が非常にある」とのこと、地域に応じた支援のあり方が必要と感じた。

## 3. 連合「愛のカンパ」の助成団体

4日目に訪問したAAR「難民を助ける会」(2012年度60万円助成)の、ラオス・ヴィエンチャン事務所では、車椅子の製造と普及支援や障がい者向けにキノコ栽培の小規模企業支援などの活動報告を受けた。車いす支援については10年間で約3,000台を配布するが、国連によると6万人(人口の約10%)に必要とされているとのことである。連合「愛のカンパ」の支援については、今後も地域で顔の見える活動をめざして取り組む必要がある。支援先の活動も報告を求めることが課題であり、関係者との連携を強化していきたい。

最後に、今回のワーキング・スタディ・ツアーの参加にあたり、CSA事務局をはじめ、参加メンバーの皆さんに感謝申し上げます。



ラオス教育スポーツ省で

## 2013 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン グンゼ労働組合 縄手 茉莉

風邪で体調を崩しながら参加した今回のツアー。こんな体調で1週間も海外でやっていけるのか……とかなり不安いっぱいでしたが、結団式で「ツアー中に風邪を治す！」と宣言！そして、宣言通り、現地に着いた途端、風邪は完治！気合でなんとかなるものですね…。おかげでツアーはとても楽しく、貴重な経験をたくさんさせていただきました。

今回のツアーで一番印象に残っているのは子供たちの元気いっぱいの笑顔です。教科書もノートも不足している中でも、勉強に一生懸命取り組んでいました。中には「遊びよりも勉強が好き」という子もいたくらいです。CSAの学校建設の取り組みは本当に現地の子供たちにとって必要な活動だと改めて実感しました。

また、小学校では生徒たちと折り紙をしたり、綱引きなどの交流も行いました。綱引きではみんな本気!! 生徒同士での綱引きで、女の子 vs 男の子で勝負していましたが、女の子が強すぎて笑ってしまいました。

その後訪問したサンティパープ高校の寮生も明るく元気いっぱいでした。寮生は日本語や英語を学んでいるので直接話すことができとてもよかったです。寮生は勉強だけでなく、伝統的な踊りなども学んでいるだけあって、踊りや歌がとてもうまくて驚きました。私たちも寮生と一緒に踊ることになり、初めはぎこちなかったですが、終わるころにはみんなノリノリになってしまいました。セレモニーの最後のバーシーと呼ばれる儀式では、「いいこと



高校生寮のバーシーセレモニーで

がありますように」「幸せになりますように」と寮生から一人一人、手首に紐を結んでもらいました。寮生の気持ちがうれしくて感動！中には「money… money… ♪」と言いながら結んでくれる子もいて、笑ってしまいました。また、このツアーに参加してよかったと感じたことは、救援衣類が現地で役立っていることを自分の目で確認できたことです。倉庫に山のように詰まれたダンボールの中から自分たちが送ったダンボール箱を見つけたときは本当にうれしかったです。他のメンバーも自分たちが送ったダンボール箱を必死で探し、写真を撮っていました。また、倉庫を管理されている方からいろいろとお話を伺い、「子供服が不足していること」「長袖の冬服がとても役立っていること」など説明を受けました。私が今回のツアーで現地に行くまで、単なるイメージだけで“暑い国に長袖の服は必要だろうか？”“半袖だけのほうがいいのではないか？”と思っていたのですが、北部のほうは特に一日の寒暖差が激しく、朝晩はとても冷え込むため、半袖の服だけで過ごすのは難しく、冬物衣類の必要性を実感しました。これから救援衣類を送る際にとっても参考になる経験となりました。今回、現地で聞いたこと、感じたことは日本に持ち帰って、これからの活動に役立てようと思います。

最後になりましたが、CSAの渡邊事務局長、山岡事務局次長、参加メンバー、現地において通訳、調整をしてくださった関係者の皆様には本当に感謝しています。

ありがとうございました！

## 2013年 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン コモディイダ労働組合 並 木 良 枝

昨年暮れに委員長より派遣のお話をいただいた時は、体調も悪く、飛行機が苦手だったので即答でお断りしたのですが、「半日考えて欲しい」との事で、店長に相談した所、「是非、行った方が良い」と言われ、同僚も気持ち良く留守を引き受けてくれると言うので、重い腰をあげた次第ですが、終わってみると、行かせていただけた事に深く感謝しています。まずは、ラオスの地雷博物館訪問ですが、日本を通して(広島や長崎)戦争を考える事はありましたが、他国からやっぱり戦争は、絶対に起こしてはいけないと再認識し、日本以外でも、こんなに苦しんでいる国が世界にはたくさんあるのだと改めて思いました。

救援衣類保管倉庫視察では、自分の組合で送った古着の箱が、どこに置かれ、どんな仕分けをされ、誰にどんな形で引き渡すのか、などを知ることができました。仕分けをする方が



ラオス衣類倉庫で

少なく、効率の悪さを感じましたが、小さい子供達に小さいぬいぐるみが喜ばれる事や、暑いラオスで冬物が必要な理由などや共にボランティアで活動した仲間や、古着を持参してくれた各店の皆さんにきちんと報告をしたいと思います。後、訪問先には保健省、教育省もあり、普通では出会えない各省の方々にラオスの現状を聞くことが出来ました。そして、何よりも良かったのは小学校に視察に行き、折り紙(風船)をしたり、童心にかえって綱引きをしたりと、心に残る楽しい時間を過ごせたことです。先生の中には、自分の赤ちゃんを連れての仕事(多分、教師も不足している)でも、他に先生も子供達も、その赤ちゃんを可愛がっていました。学校によっては、教科書も不足している中、先生を尊敬し、一生懸命勉強をする子供達、それを見守る大人達と、昔の日本もこんなふうだったのでは、と思いをさせられました。今、日本は学級崩壊など問題がありますが、教育の原点がここにはある様に思いました。サンティパーブ高校視察でもラオスの民族衣装での踊りや歌の披露がありましたが、文化の継承も教育されている様で、教育とは、文化とは、広い意味で日本も考える時ではないかと思いました。サンティパーブ高校視察では、バーシー・セシモニーもして頂き、感動で涙があふれてしまいました。

ラオス・タイと、もう二度と行けないと思う大使館でお話を聞かせていただきました。ラオスは治安も良いし、食事も日本人にとっても合うと思うので、これから観光客が増えて欲しいとの事、私も多めに宣伝をしたいと思います。タイでは、都市部と農村部では格差が激しく、場所によっては本当に貧しい人々がたくさんいる事を知りました。課題としては、ラオスでは衛生面(死亡理由1位が下痢)、教育面(学校や教師・教科書の不足)、地雷など。タイでは、格差社会や交通(渋滞やその為の空気の汚染)などありますが、両国共、親日の国なので互いに援助・発展をして欲しいです。

最後に、今回ツアーに参加出来た事に関わったすべての方に感謝をしたいと思います。団長挨拶に述べた“広い目・広い心”を持って、これからの人生を歩みたいと思います。ありがとうございました。



## CSAワーキング・スタディ・ツアーを終えて

UAゼンセン すかいらくグループ労働組合連合会 駒形 文人

今回、UAゼンセンの代表として1月26日(土)より2月1日(土)の5泊7日の日程でツアーに参加させて頂きました。訪問の目的はタイ、ラオスの経済的、社会的に恵まれない人々との交流を通じて、その生活実態を把握し、CSAの活動が生活困窮者の自立に役立っているか等を現地で確認して、今後の活動の在り方について検討することです。

現在のCSAの活動は主に3つあり、①タイ、ラオスへ日本から中古衣料などの救援衣類



タイの救援衣類の倉庫で

を送る運動 ②ラオスでの小学校や中学校の建設や教科書、文房具、運動具の提供 ③遠隔地高校生支援事業として、経済的な問題を抱えるラオス北部出身の成績優秀な高校生への寮生活や生活支援活動、となっています。

今回の視察では救援衣類保管倉庫を訪ね、衣類の保管状況や仕分け、現地での要望などを直接伺いました。倉庫にはUAゼンセンや各支援団体から送られた衣類の入った段ボールが大量に保管されており、(タイ、

ラオスを合わせて2012年には144トンもの提供がされています)その量からも、このCSAの活動の大きな力を感じました。一方でそれを仕分けして地方へ配送するための作業人数不足や効率などは課題の1つであると感じました。また、小さな子供服やぬいぐるみの要望があることなども伺いました。これまでも現地の声を反映させて、サイズ・種類別に仕分けして送ったり、現地の言語で表記したりと改善がされているということでしたので、今後は更に支援を受ける人や、それを支える人のためにも現地の声を聞いて欲しいと思います。

CSAの支援で建設された小学校には3校訪問させていただきました。そこでは小学生や先生からの暖かい歓迎を受け、折り紙や綱引きを一緒にしたり、楽しく交流を深めることができました。CSAとそれを支援する組合や組織のお陰で、ラオスにはこのような学校が23校もあるそうです。ラオスには空港の建物や市街を走るバス、その他多くの所で日本の日丸を見ることができます。これは日本政府やNGOがラオスに対して援助を続けてきた証で、ラオスの人々との会話の中でも日本への感謝の気持ちが根付いていることを肌で感じ、私も日本人として誇りに感じることができました。また、小学校で印象的だったのは「好きな科目はなんですか?」というこちらの問いに、「国語」という声が一斉に聞かれ、「それはなぜですか?」の再度の問い掛けに対して、「ラオス人だから」という答えが何人かから返ってきたことです。これには私たち全員がハッとさせられました。はたして我々日本人に同じように国や文化を愛する気持ちがどれだけあるのだろうか? このような海外での視察や交流を通じて、私自身「日本人として国を想う」気持ちを認識できたことも大きな収穫でした。

他には遠隔地高校生支援事業の寮で暮らす高校生や卒業生を訪ねました。そこでは親元を離れ一生懸命勉強し、将来ラオスという国を自分達で変えていくんだという現代の日本人の若者では少ない熱意を感じることができました。ほかにも、30年以上活動続けるNPO法人AARジャパン(難民を助ける会)では不発弾処理や被害者支援を続ける日本人とお会いして、その活動内容を伺いました。また、ラオス保健省や教育省、タイの社会保健省、日本大使館への訪問と意見交換では、それぞれの国で抱える問題と日本との関わりを知ること

で、日本が世界やアジアの一員であることを認識し、これからもお互いにとって良きパートナーシップを築いていくことが重要だと感じました。

今回のツアーでは、私が今まで知らなかった人々と多く出会い、見聞を広められたことは何よりの財産になりました。そして、組合活動の原点である「人の為に役立つことが自分の喜びになる」ことを思い出させてくれました。この経験を今後の組合活動の中で活かしていきたいと思います。末筆ではありますが、CSA渡邊事務局長始め、事務局の方々、参加メンバーには大変お世話になり感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 2013年 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工労働組合 萩原 健

今回のCSAワーキング・スタディ・ツアーにおいて、現地での訪問や視察を行い、ラオスでの教育事情や社会事情、そしてCSAで行っている救援衣類を送る運動・小学校建設状況等について、理解をすることが出来ました。ツアーを通じ、感じたことを報告します。

1点目は、「CSAで行っている救援衣類を送る運動」は、ラオス・タイの人々にとっても感謝されていることです。必要に応じ需要に沿った形で働く仲間の思いが各地へ届けられていることを実感しました。特にラオス北部の支援を必要としている地域では、服も買えない家族も多く、「衣類をいただき非常に助かった」とのをお聞きし、送った衣類についてはありがたく活用されていること等、今後も「救援衣類を送る運動」の必要性を感じたところでもあります。一方、送る側としても現地での作業の効率性など現地の実態を踏まえた上での展開方法など考える必要が有ると思いました。

2点目は、小学校及び高校を視察・交流したなかで、決して豊かでない地域であっても、「元気・明るさ」を持ち、村の人々が協力し合いながら生活をしているのだなと感じました。また、子供達については、素直に感謝・喜びを表現することが出来、何よりも教育を受けれる喜びを全員が実感していました。自身も新鮮な気持ちにさせられ反省カ所を多々感じさせられました。CSAでは、小学校建設地の選定は、自立支援型の観点から「村人の協力度合い」を考慮して決めており、その事が今回の視察・交流で理解出来ましたし、今後そのような地域・子供を支えて行くための活動の大切さを感じました。



高校生寮で

今回のツアーを通じて、支援を受けている地域の人達からは、「自分たちで何とかしよう」と取り組む姿勢・意思を強く感じる事が出来ました。また、自分がボランティア活動を行うにあたって、ただ『かわいそう』という気持ちでやるのではなく、格差のある社会の中でその格差をバネに将来の自分を描き、その目標向かってひたすら努力する子供たちと出会い、その手助けとなる為に自分に何が出来るのか、多々考えさせられました。単なる物資等の支援だけでなく、自分で状況を認識し、見識を深め、自分が何をすべきかを考えることが重要であると考えます。今回のツアーで学んだことは、これからの活動にきっと役立つものと信じております。最後に、ツアーにおいて、サポートいただいたCSAの渡邊事務局長・山岡事務局次長を始め、ツアー関係者・参加者の皆さまに深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 2013 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 IHI労連 堺支部 藤 井 馨

私の支部（IHI 労連堺支部）は昨年4月に発足して、まだすべての活動を把握していません。そんな中で今回のツアーへの参加依頼が労連本部からありました。それ以降CSAが救



高校生寮で

援衣類を送る活動をしていることを知り、“いろんな事をやっとな”と思ったところです。パスポートとの期限が切れていたのでは丁度いいわと思いつつパスポートの取得から始まり、出発の日を迎えました。

当日結団式を行う会場に到着し、参加者の顔ぶれを拝見しながら、気難しい人おらんかったらええのになぁと思っていると、関西弁が聞こえてきて、なんや関西人おるやんかと秘かに思っていました。自己紹介となり、さすがにみなさん執行委員なので、しっかりと自己紹介されていました。

定刻に羽田を出発し日本を後にしました。予定通りバンコクに到着し3時間空港内で次の飛行機を待ち、ちょっとしたハプニングがあったものの無事バンコクを飛び立ち、ラオスの首都ヴィエンチャンに向かいました。到着後、またまたハプニング！ 渡邊さんの荷物が1つ乗っていませんでした。話を付けて戻ってきて来たところ、“あなたがラオスにいる間に届けばいいね”という返事。何とものんびりしている……。しかし、次の日の朝には届いていました。到着日は日曜日で官庁は休みなので市内視察を行い初日を終わりました。

月曜日、ラオス各所の訪問が始まりました。私のラオスの印象は映画で見た大量の爆弾（クラスター爆弾）を落とされた戦争被害国と言うイメージでした。地雷博物館を訪問し、被害の実態を知りクラスター爆弾の影響がいかに大きいのか、また処理がいかに難しいかを知りました。処理が今のままだと100年以上かかるとのこと、ここにもいろいろな国の援助が必要だと感じました。次に救援物資倉庫の視察です。まだ仕分けされていない箱が山積みになっていて、これから配るんやなと思いました。IHI労連各支部の箱を探しましたが残念ながら見つけることはできませんでした。倉庫を後にし昼食の後、教育省を訪問しました。副大臣が会ってくださり日本、連合、CSAには大変感謝していると言われ、今後も支援をお願いしたいとのことでした。教育の面では、教科書が不足している学校があり、省として何とかしないといけないと考えているようだった。次に今回最初の学校クッサンバット村小学校を訪問しました。生徒に会ってまず感じたのは、すべての子供の目がきれいでキラキラしていてとても澄んだ目をしていると。日本の学校とは設備面で全く違うが、勉強をしたいという感じは強く伝わってきた。可能ならば学校施設を充実させてあげたいと思う。この日の夜にサンティパーブCSA高校寮の卒業生と交流会を行った。食事をとりながら交流会が始まったが、まずは言葉の壁だ。こちらは英語が話せず、相手はラオス語か英語。英語の断片的な単語を聞き取りなんとか会話？ が成立して話が弾みました!? 5名の卒業生と同席しその中の2人（男性）が、今年11月に日本の大学に留学するそうで、そのために今日本語を勉強していて少し日本語で会話をしましたが、あまりお互い意思は伝わってなかったように思う。



火曜日、まずはラオス日本大使館への訪問ですが、非常に警備が厳しくカメラ、携帯電話は預けなければ入る事ができません。特に携帯電話はGPS機能があるため、大使館内部が外に筒抜けになる事を防ぐためだそうです。会議室に通されいろいろなお話を聞くことができました。ラオスは非常に親日国で日本の政府も世界的にトップの支援をしています。ラオス国内の問題で労働者の多くがタイへ出稼ぎに出ており、ラオスとしては出稼ぎ労働者を減らしたいと考えていて、各国の企業の参入を期待しているそうです。大使館を後にして、陸路バンビエンニ向けて出発です。道路を心配しましたが、とても整備されていて想像以上でした。ムアンソン村小学校に到着して生徒から出迎えを受け、校長先生などと懇談しました。生徒たちと交流のため綱引き大会をし、大いに盛り上がりました。その後お土産の贈呈式を行い鉛筆やノート等を贈った。こんなに喜ばれるならもっと持ってくればと思いながら、日本の子供たちはあって当たり前前の生活をしているので、大事に使うことを日本に帰れば子供に言おうと思いました。

水曜日、早朝からタフゥア村小学校を訪問。校長、副村長と懇談会を行った。前日の学校もそうだったが、子供たちの勉強に対する意欲は強く、それをサポートする先生方もしっかりと頑張っている。群や県の勉強の大会に出場し優勝する子供もいる。時間が短く、生徒とのふれあいはあまりできなかった。ここでもお土産贈呈式を行い同様に喜ばれた。再び4時間かけてヴィエンチャンに移動。AAR(難民を助ける会)を訪問した。この団体も連合から愛のカンパを受けている。活動は地雷などで足を失った人などに車いすを提供したり、製造技術を教えたり障害者支援をしている。その後空路ルアンプラバンに移動した。

木曜日、ラオス最終日。サンティパーブCSA高校寮の視察を行った。寮生は80人いて勉強以外にも、伝統文化を学んでいる。歓迎の踊りを披露してもらい、参加者も交えて踊った。寮内を見せてもらったが、厨房は薪で食事を作っている。寮生の部屋は一部屋に2段ベッドが2台あり生活している。整理ができていて、ポスターを貼っていたりして、高校生らしい部屋だった。その後市内視察を行い夕方、ルアンプラバンから出国し、バンコクへ向けラオスを後にした。

金曜日、ツアー最終日。タイ社会福祉省を訪問。次官が「日本の支援はタイの恵まれない人々のために役立っている、支援が今後も継続されることをお願いします」と挨拶された。タイの首都バンコクは発展しているが、農村部との差は大きいと聞いた。タイの地方の村も訪問できればと思う。そして、救援衣類倉庫を視察。ここでIHI労連名古屋支部から送られた箱を発見。仕分け作業をしている方を紹介され、実作業を見せていただいた。昼食の後タイ日本大使館を訪問しタイの現状を教えていただいた。深夜バンコクを出国し、帰国となった。土曜日早朝成田に無事到着し、解団式を行い、それぞれ帰路についた。

最後に、ラオスの食事は非常においしかった。個人差はあると思うけど私は美味しくいただけた。治安もよく、海外旅行を計画する方がいれば、ラオスをお勧めしたい。ラオスはまだまだ支援が必要。特に爆弾処理は先進国の多くが協力して少しでも早く処理する必要がある。また、教育、インフラもしっかりと支援し、少しでも生活がしやすい環境になればと思います。ラオスでお世話になった事務局のイーさん、通訳のフンペンさん、お二人とも素晴らしい方で、またお会いしたいと思います。そしてCSA事務局の渡邊さん、山岡さん本当にありがとうございました。仲間みんなありがとう！再会を祈念してレポートを終わります。



## 2013 ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 JFEスチール千葉労働組合 末 武 研一郎

CSAの活動内容については、今回のツアー参加に声を掛けていただくまで恥ずかしながら全く知りませんで、事務局より事前に送付頂いた資料にてCSAの概要等を確認し、理解することが出来ました。このように、救援衣類の支援活動に直接関わってこなかった私が参加してよいのか不安があったのですが、結団式に臨み、会長からのご挨拶で「CSAが行っている活動経過を点検し、今後の活動に活かして欲しい。元気に帰ってきて下さい」との激励に、自分なりに現地でどのような支援が必要なのかをしっかりと考えてようと誓いました。そして、実際にツアーに参加して、皆さんとともに現地状況を点検し、意見交流を通してCSA活動の意義を理解することが出来ました。



バンビエンにて

まずは、今回の視察の大きな目的の1つである救援衣類についてですが、救援衣類の保管倉庫では、今回参加された労働組合さんの物資が数多くあるなか、私は「どのような産別組織が支援を行っているか」の視点で点検させて頂きました。今回、ラオス・タイにて救援衣類の視察をおこない気が付いたことは、私たち基幹労連のなかでも救援衣類の支援については、現状、特定の労働組合さんが力を入れて取り組まれているに留まっており、この活動をもっと各組織に広げることが出来れば、今回体験した救援物資が足りない状況に大きく貢献出来ることを強く感じました。また、物資もそうですが、仕分けをするスタッフも人員不足から膨大な作業を抱えており、なかなか捗っていない状況であることから、困っている方々へ迅速に衣類を届ける体制作りについても、今後、関係省庁に働きかける等の検討の必要性を感じました。また、その為にも我々は基幹労連の「ふれ愛カンパ活動」を通じた支援活動を、今後さらに拡大、継続するよう取り組んでいきます。

次に、教育に関する支援についてですが、CSAは、ラオスにおいてこれまでに22校の小学校と1校の中学校、そして高校寮を寄贈してきたことで、多くの地域で教育を受けることが出来るようになりましたが、なお、家庭の事情で学校へ行けない子供達もいると聞きました。今回の視察で交流出来た子供達は皆、明るく元気良く、「勉強が楽しい。学校が楽しい」と言っていました。日本でも同じような問題はありますが、学校以外で自力で何かを学ぶ環境が、ラオスにおいてはより少ないと思いますので、ラオスの各村々すべての子供達が授業を受けられるような取り組みを関係省庁と一体となって進めてもらいたいと思います。

また、CSAでは地方など遠隔地からの子供達への教育支援として、高校寮の寄贈、運営も行っていることから、今回、寮生、および卒業生達との交流にも参加しました。皆さんとても素直で勤勉であり、寮生においては歓迎の儀式を以って我々に精一杯の礼を尽くして頂いたこと、卒業生においては、我々に次々と英語で質問をする積極的な姿勢に触れたこと等、ラオスの将来を担う学生達の志の高さにとても感銘を受けました。

また、今回の視察においては、各訪問国の事情を学ぶうえで大使館、地雷博物館、現地で活動するNPO団体への訪問・意見交換により、国の政策や歴史等、全体像を踏まえての救援活動の実態について考えることが出来ました。現状、日本と海外との関係では、少なからず何らかの問題を抱えている国が多いなかで、とても良好な関係にある当国への訪問は大変貴重な経験となりました。

行く先々でラオス国旗とともに、支援国である日本国旗等が掲げられている光景に、ラオスの人々の日本への感謝の気持ちが感じ取れ、とてもうれしく思いました。今後も相互協力の関係を継続してCSAの活動に協力していくとともに、是非、いつかまた、ラオスの子供達の明るい笑顔が今と変わらぬことを確認に訪れてみたいと思います。

最後になりますが、長いようでとても短い充実した7日間であり、ツアーを通して皆さんと共にラオス・タイでの支援について考えることが出来、大変貴重な経験をすることが出来ました。CSA事務局様、ならびにツアーに参加された皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 2013 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

JAM組織・調査グループ 西 巻 孝 之

今回のワーキング・スタディ・ツアーへの参加にあたり、CSA事務局、現地関係者に対し心より御礼申し上げます。そして今回お会いしたラオス、タイの人々に対し、とても好意的に歓迎してもらったこと、重ねて御礼申し上げます

初めて訪れるラオスという国の印象は、おだやかな国だという印象をもった。移動中、車の中からの景色は、建設中の家があったり、道路工事が行われていたり発展中という印象で、外国からみると最貧国のひとつという話を聞くが、国内においては生活するうえではあまり貧しさというものを正直なところ感じられなかった。

ラオスと日本とは国交樹立から57年を迎えている。日本からの直行便が就航していないとは聞いていたが、空港建設等に日本が無償協力しているのになぜ？ という疑問が湧いたが、日系企業の進出数に関わっているのかと感じた。

表敬訪問では、保健省、教育省、学校関係者と意見交換を行ったが、教育に関わる予算が依然低いと感じられた。就学率も大きな問題。教育省からは学校建設の要望もあり、学校建設が必要な地区があると思われるが、そのような地域は不発弾があり(処理費用も問題)、処理が終わらなければ学校も建設できない。国としても支援側としても大きな課題が立ちだかっていることを感じた。また乳幼児の死亡率のことも意見交換されたが、死亡率の減少のためにも学校で衛生に関する教育にも力をいれてほしいと感じた。



バーシーセレモニーで

今回、小学校3校を訪問し、見学・交流したが、どの学校も教育に力を入れている姿が見え、特に優秀者が出ているのが非常にうれしい。校舎をみて1番目校には教室に蛍光灯がない。他の学校には、蛍光灯が設置されていたが、訪問時は使っていなかった。日本的観念でものをいうつもりはないし、過保護になる必要はないと思うが、視力に影響がないかが心配になった。教科書は国から各学校に支給され、貸与になっているが、必要分または生徒数に応じて機敏に対応していない。一律に支給できない理由を整理し、課題を克服してもらいたいと思った。

サンティパーブ高校の学生寮視察では、試験が近かったこともあるかと思うが、高校生の勉強熱心さに驚いた。また民族舞踊、伝統儀式が受け継がれている点などが印象的だった。しかし寮のトイレの故障の問題は切実。どのような形にしても、早めに解決してほしいと思う。

日本とラオスの歴史だが、ラオス独立にも日本は関わっている。そのことについて、ラオス人の中には当時のことを親から聞いているとの話を聞き、自分たちの先輩がアジアの国々でどのような関わり、活動したのか日本人が知らないことが伝えられていることが嬉しい反面、恥ずかしさを覚えた。ラオスの支援の実態を知るためには、少数民族や学校建設地の周辺に住む人々の生活がもっと見えるとわかりやすいと感じた。小学校訪問、児童と交流したが、自分の子供にも見せたいし、ラオスの子供と交流させたいと思った。

最後にそして現在も教育を受けていない子供たち、そして何らかの理由で学校に通えない子供たちにも何かしてあげたいと感じた。小学校で、国語の勉強を熱心に学ぶ理由について質問した時、「ラオス人だから」という答えがとても印象的だった。



卒寮生と交流



## 2013年 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

印刷情報メディア産業労働組合連合会 田 倉 正 司

印刷労連はCSAに評議員を選出しているものの、救援衣類の取り組みやワーキング・スタディ・ツアーへの参加へは消極的でありました。しかし、選出している評議員からCSAの活動や取り組みについて報告を受け、労働組合として弱者救済の観点から取り組みを進めるべきと判断し、今回より救援衣類の取り組みを実施いたしました。また、ワーキング・スタディ・ツアーの話聞き、役員を派遣するべく組織内議論を進め参加することを決めました。実際に派遣者を決める段階になり私が互選されました。



フンペンさんと

まず、救援衣類について担当省庁であるラオス保健省ならびにタイ社会開発福祉省を訪問し官僚の方々との意見交換をしましたが、感謝の意を示されていることを実際に感じ取ることができました。また、救援衣類保管倉庫にて送付された衣類の確認もできましたし、我々の多くの仲間からの弱者救済の意が確認できました。一人ひとりの力は小さいものの、多くの働く仲間の力で大きなものとなり世界の貧しい方々の援助になっていることを誇りに思います。

また、CSAおよび連合からの支援によって建設された小学校も3カ所訪問しました。子どもたちに歓迎され、子をもつ親として大きな感激を受けました。子どもたちは素直で真っすぐに生き、一生懸命勉強しており競争心も兼ね備えて素晴らしさを感じました。日本も数10年前は同じように貧しく、素直で真っすぐであったのですが、現在では少し様相が変わってきております。そして綱引き大会で盛り上がり、校長先生や村長からは大きな感謝の意が示されました。

更には、CSA寮では高校生や先生方から大きな歓迎を受け、現地の民族舞踊や歌ならびに祈りを込めた儀式など大いに盛り上がりました。寮を拝見いたしました。小さな部屋に多くの生徒が生活している様相が伺え、日本は恵まれていることを改めて感じました。そして卒業生との交流では色々な話を伺いましたが、夢をもって将来を見ている姿がとても印象的でありました。

今回、ワーキング・スタディ・ツアーに参加して感じたことは、貧しい子どもたちではあるけれど一生懸命に勉強して真っ直ぐに生きていることに感銘を受けましたし、日本の子供たちも見習わなければならないと感じました。また、CSAおよび連合の支援は世界のために役立っており、我々労働組合も小さな力ではあるけれどもみんなが結集することにより大きな力となり、まさしく労働運動の原点を改めて認識しました。更には、他の組織の方々とのネットワークも形成され、新たな仲間が出来たことを実感しました。事務局は大変であったと思いますが、この様な貴重な体験をさせて頂いたことに感謝を申し上げます。感想といたします。ありがとうございました。



## 2013 CSAワーキング・スタディ・ツアーに事務局として参加して

CSA事務局次長 山岡 みゆき



エーさんと

前と顔を一致させるように努める、④次年度のツアーのあり方を考える等でした。

昨年10月にCSA事務局に赴任して、初めてのスタディ・ツアーでしたので、出発前は期待と不安で一杯でした。事前に準備する中である程度知識はあったものの、実際に見て、交流して、初めて理解・体感したことが沢山ありました。今回のツアーの事務局として参加する上で、自分としての目的は、①CSAの活動の現場を実際に見て何かを感じてくる、②ツアー事務局としての仕事を最低限覚える、③現地のカウンターパートの名

実際に現地に行き、①については、これまで長い間のCSAと関係者の方々の活動の証である小学校や高校生寮を視察し、今も実際に活用され、その地域にとってはなくてはならないものとなっていることを実感することができました。そして、CSAの活動は、ラオスの未来を担う子どもたちの教育支援に確かに役立っていると思いをさらに強くすることができました。また、CSAが送った救援衣類もしっかり活用されていることがわかりました。②については、ツアーメンバーをまとめ、安全に進行するために気を配ることや訪問先での役割、空港での導線や手続き、支払・清算等の事務局として最低覚えなければならないことを学びました。③は、ラオスでのCSAの活動をサポートして下さる佐古商店のエーさんやコーディネーターのフンペンさんはもとより、文書でやりとりしていたラオス教育省・保健省、ならびにタイ社会開発福祉省の方々に会い、実際に話をすることができました。④は、今回のツアーに向けて、じっくり自分なりに考えていくための材料を得ることができました。

というわけで、当初の目的は、ほぼ達成されたツアーとなりましたが、多くの反省反点もあります。その一つは、事務局の役割を覚えるのに精一杯だったことや体力的なことを考えてしまい、参加された方々と時間をとお話する機会が少なかったことです。メンバーの方々ともっとお話したかったと思います。それは、これからの同窓会で少しずつ実現させていければと思います。同じ釜の飯を食べた新たな仲間ができたことが、今回のツアーの最大の収穫であり、CSAにとっても私にとっても未来につながる架け橋になると思います。

CSAの事務局員として初めてのラオス、タイへの現地視察の旅でしたが、なんとか無事に事務局を務めることができました。これも参加者の皆様の事務局への最大限のご協力と渡邊事務局長の温かいご指導、そして、出発前の吉井会長の心強いご支援のおかげと感謝しています。本当にありがとうございました。

## 編 集 後 記

開催時期を1月初旬から下旬に移行した今回のCSAスタディーツアーに参加した11名のメンバーは無事に任務を果たし「全員無事帰国」が適いました。皆様のご協力の賜物です。厚くお礼申し上げます。

視察内容は報告書に記載のとおりですが、それぞれの国で訪問・視察を通じ、衣類支援や教育の重要性を再認識すると共に、児童との折り紙や綱引き、高校生との踊りやラオスの伝統的儀式であるバーシーなどの交流を通じ、その国の文化に触れ、また童心に戻り、学びと癒しの時を過ごしました。



卒寮生たちと

また、今年もヴィエンチャンでラオス国立大学に進学した高校寮卒寮生38名と多くの学生と交流の場を持つことができました。入寮当事から見守ってきた子どもたちが、将来に希望を持ちつつ勉学に励み、目を輝かせている姿は、「お母さん」としては感激です。

毎年、視察の一環として、ラオスとタイの日本大使館で現地事情のブリーフィングを受けしており、今回、ラオスではラオスの実情のみならず、米国など世界のラオスに対する反応を学ぶことができました。

タイにおいては、労働組合からの11代目派遣書記官であり、また一時期、筆者と共に出発先で机を並べた仲間であった伊藤書記官によるブリーフィングの際、特に、タイとミャンマー国境沿いの難民キャンプ内の難民帰還に向けた職業訓練計画への支援プロジェクトを官民連携により実現させることができた、という話が印象に残りました。赴任先のタイのみならず、ようやく民主化が実現されつつあるミャンマー社会の安定化にもつながるプロジェクトの話は極めて新鮮であり、国境の子どもたちが切望する白い学生シャツを、今後どのようにして収集・送付できるだろうか、と「救援衣類を送る運動」の新たな支援先などに思いをめぐらせたタイでのひと時でした。

事務局は毎年、アンケートのご意見、反省点などを参考にし、できる限りの工夫を凝らし、視察の内容向上を図っています。今回は地雷関係の訪問を入れ、ベトナム戦争等の暗い過去により発展が著しく妨げられているラオスの実情把握に努めました。「予想していたよりよかった。感動した」と言っていただけでも多かったと思います。また訪問国に惹かれて「戻る」方もいらっしゃると思います。

でも「初めては一度だけ」です。小学校や高校生寮で接したあのすばらしい笑顔、純粋な瞳など今回の感動と感激は心の中の宝物です。そして未参加の方々、どうぞ「自分だけの初めて」を経験しに参加してください。

最後に参加者、参加組織の担当者、現地協力者の方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。コップチャイライライ。ຂອບໃຈ ຫມາຍ ກາວາຍ。

アジア連帯委員会(CSA) 事務局長 渡 邊 ひな子





CSAが建設した小学校のプレート



小学生と折り紙で交流



タイ救援衣類倉庫のスタッフと



ムアンソ小学校でのヒアリング



ラオスの佐古商店 (CSAをサポートしていただいています)



小学校へのお土産

## **2013年 CSAワーキング・スタディ・ツアー報告書**

---

発行日 2013年3月

発行者 アジア連帯委員会 (CSA)

〒105-0014 東京都港区芝2-20-12 友愛会館14階

Tel (03)3769-4177 Fax (03)3769-4178

印刷 同栄印刷株式会社



